

学童疎開記録見つかる

豊島区南長崎2の松江きく乃さん(86)方で、戦時中の学童疎開先で撮影された写真12枚と、付き添った教諭の日記が見つかった。日記は松江さんの伯母で小学校教諭だった関根さかさんのもの。写真は遺品の中に入っていた。学童疎開中の写真は希少で、日記も記録的価値が高く、松江さんは、戦中戦後の生活を伝える国立施設「昭和館」（千代田区）に寄贈した。同館は将来、公開することを検討している。

【柴田朗】

食糧事情厳しさを克明に

関根さんは松江さんの父の姉。疎開時代を含む1944年から御田国民学校(現・港区立御田小)で教諭を務めていた。区



関根さかさん

教諭などによると、同校の児童は44年8月23日、45年10月に栃木県日光市の川治温泉へ疎開。当初

は3年生以上の約250人だったが、日記には食糧事情の厳しさを嘆く記述が目立つ。44年9月6日は「児童の広間で正座して勉強する子供たち▽男鹿川河原でのたき火▽遠足の風景▽ホテル前での集合写真」など。12枚中10枚の裏に「昭和十九年秋川治に疎開して」など、川治に疎開してはならぬといふ立札がある……」と書きつつ、その後もくり拾いを続けていた。男鹿川河原のたき火は

同10月15日。日記には出来事だけを淡々とつつつているが、写真の裏に「子等ほく笑みつ涙流しつ」と、児童の様子を記している。

疎開中に痛ましい事故も起きた。6年生の男子が外出したまま戻らず、同11月16日の日記に「男子の父、親戚の者と共に来る。もう探しても見当たらない」と嘆くように記していた。行方不明

50〜51歳のベテランで、疎開当時の関根さんは

明から約4カ月後、児童は川から水死体で見つかった。

「弱音を吐かない厳格な女性」（松江さん）。だが、娘のように可愛がった松江さんに疎開先から「寮母が代用教員にならな

ないか」と手紙を送ってきたことがあった。松江さんは断ったが、「よほどつらい日々だったので」と想像する。

関根さんは50年に定年退職。独身で、86歳で亡くなるまで旅行や短歌を楽しんだ。しかし疎開時代のことは口にせず、疎開先を再訪することもなかったという。



川治温泉のホテル広間での授業風景。右後方に関根さんの姿がある



男鹿川の河原でのたき火
＝写真はいずれも松江きく乃さん提供